
心の病

桐山レイラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心の病

【Nコード】

N0343P

【作者名】

桐山レイラ

【あらすじ】

自分がかかった心の病、その事について描きました。
こんな人生になるなんて誰も予想しなかった事……。
もうだめだ、私はこれからどうすればいいのだろう。

（前書き）

今から書く一連のエッセイ（のようなモノ）は、私が罹っている、精神病になった事で、私の人生ががらんと変わってしまったと言う事をつづりたいと思う。

人生は人それぞれだ、一生幸せな人生で生涯を閉じる人は、探しても、おそらくほばいないだろう。

私は、こんなにひどい人生があるのだろうか、そう思う位、毎日が苦痛で仕方がない。

だけど、私は人間として、女として、人生を精いっぱい生きようと決心した。

そう思って、この文を書きとめようと、思った。

読んでいて、嫌な気分になる方がいるかもしれない。

でもこれは事実。私自身も受け止めなければならぬし、こんな人生を歩んでいる人が居る。それを、これを読んでいる読者に、少しでも理解してもらえれば幸いです。

今日も、いや、ほぼ毎日が晴天だった。

だけど、私の心は、どんよりとした雲がかかっているように、さえない。小学生のころだったか、学校が嫌になったのは。小学校五年と六年の先生が同じで、しかもその先生が元から好きなタイプの人間ではなかった。むしろ嫌い、という類に入った。

先生が怒った時には、物に当たって、机をけったりするし、自分の思い通りに行かないと、生徒全員に怒鳴り散らしているし。

その先生というのは、よく前の学校の話をしていた。それも、前の生徒と、今の私のクラスの生徒とは大違いだ、だとか、その前の生徒は、今でも、先生の事を尊敬してくれているだとか。

初めは、私も小学五年だったし、その事が本当だと思っていた。でも、六年の終わりになるにつれ、その話が信じられなくなっていた、二年間同じ先生で、少しは変わるかと思ったけど、全然変わる事がない、先生の態度。そのおかげで、不登校生徒まで出た。

生徒の誰かが怒られて、その教室に居る生徒全員を巻き添えにして怒鳴り散らすなんてことは、日常茶飯事だった。今思えば、国語の授業をまともに受けたという記憶はほぼない。私の教室では、月曜から金曜日まで全ての曜日の一時間目が国語だった。そして、朝になると、必ず誰かが、宿題をやってきていなかったり、忘れてきていたり、そんな感じで、怒られていると、皆が巻き添えを食うので、1時間目はいつもつぶれていた。

私は、一応やってきてはいたが、巻き添えを食うので、だんだんと怒られる度に、人間不信に似たような感覚に陥ってきていた。

ちょっとした事で怒られただけでも、体中が震えて、ちよつと嫌味を言われただけでも、涙が出そうになって。

中学になると、私は、初めの一週間は、ちゃんと学校に行っていた。だけど、通っているうちに、だんだんと感じたこともない不安に襲われて、人目を気にするようになっていた。誰かがこちらを見ている、どんな事を思っているのだろうか？きつと悪いことだ、私に対する嫌悪感を感じているに違いない。

何の根拠もないのに、そう思い込んでしまった私は、とうとう不登校になる決定的な出来事が起こってしまった。

授業中に、前の人が、私の方を向いて、目が合うと、すぐに隣の席の子に、私の方を見ながらコソコソと話しているのだ。何を話していたのかは、私には容易に予想が付いた。それは前々から私が気にしている体の一部の事だった。それが原因で、私は先生に頼み保健室へ逃げるように移動した。普通の人なら、その位の事で何やっているんだ、と思うかもしれない。でも、私には耐えられなかった。

その日から、保健室登校が続いた。保健室登校でも、校門を通るとすぐそばに、体育館があり、体育の授業があれば、皆がそこにいる、そうして、皆より遅くに登校してくる私に向かって、生徒は罵倒するのだ。私は無視していたが、涙が出そうになる。その生徒たちに先生は気付かないのか、注意もしてくれない。

先生に告げ口仕様としたが、相手の顔を見ていなかったし、名前も知らない。言った所で、犯人なんて捕まるわけがないんだ。そう思い、母親にさえも言わなかった。

人間不信に陥ると言うのは、とても怖い事で、今はある程度は回復したと思うが、当時は、周りの人間が誰も信用できない位だった。

中学の先生は、ハキハキとした先生で、それでいてとても優しくだったが、小学校の事もあってか、恐怖が収まる事はなかった。でも、先生は、根気よく、優しく接してくれた。

今では、その先生には、感謝している。

でも中学に通っていた時期、一番不安で、怖かったのは、親の存在だった。一番の理解者になってくれるであろう、母親が、私の心境を理解してくれないのだ。

学校に行きたくない、また悪口を言われる、罵倒されて、嫌な思いをする。そう思い、必死に親に行きたくないと頼み込んだ。だが、母親はそんな私の話も聞いてくれずに、無理やり鞆を持たせ、服や腕を強く引っ張り無理やり外に放り出した。

その時に捕まれた腕の強い痛みは、今でも覚えている。しぶしぶ登校しながら、腕を見ると、赤い跡が付いている程だった。

一番病状が酷くなるのは、夜だった、寝ようとする、嫌なことばかりが頭をめぐる。また、明日は学校だ、嫌だ、行きたくない。でも母親に無理やり学校に行かされる。それが恐ろしくてたまらなかった。酷い時には毎晩泣いていた。

そのうち、私は死にたいと言う気持ちが大きくなり始めていた。二、三回ほど、自殺を図った。リストカットをしたり、母親に止め

られたが。

薬を大量に飲んだ時もあった。

そんな日々が続いて、中学も終りに近づいたころ、母親はやっと私の病状を理解してくれて、それからは、休む事が多くなった。

そして、高校生になった私は、面接だけで入れるが少しレベルの高い高校に入る事になった。

母親も、もう大丈夫だろうと思ったのだろう。

その時、酷い人間不信になっていた私は、高校に入りたくないままで思っていた。

誰もかれもが怖いのだ。でも、高校の面接の時、私は、面接官がとても恐ろしく感じ、つい、面接官の質問に対して、大丈夫です、頑張れます。の一点張りで通してしまった。

そして、家で休んでいると、高校からの手紙が届き、受かったという知らせが届いた。

親は酷く喜んでいたが、私は、後悔の嵐だった。どうしてあんなふうに応えてしまったんだろうと。そうして、週一だったが、定時制高校に通う事になった。

人間不信ではあったが、友達が一人だけ出来た。その子も、いじめなんかの不登校で、この定時制高校に入ったらしい。

その子とは少し話をしたが、あるとき、ふと学校に来なくなってしまう。学校をやめたのだ。おそらく、いじめられていた時の恐

怖心が抜けなかったのだろうと思った。

だが、私も、今までとは違った形で、恐怖心が襲ってきた、兄夫婦が1ヶ月ほど泊まる事になったのだ。子供も、まだ二歳ほどで、一番手がかかる時期、私は、初めは自分が付かれないように、あまり相手にしていなかったが、その子は私に初めは、なついてくれてよく遊んだ。でも私でも知らないうちにストレスがたまっていたのだろう。つい、その子に向かって怒鳴りつけてしまった。それから、その子は私を避けるようになった。その後も、日々疲れがたまっていくのを感じた。そしてとうとう、ある夜、金縛りにあってしまった。

金縛りにあった時、私は必死に動こうとしたが、動けない。その時だった。自分の体の上にとっても重い、二歳くらいの子供くらいの体重の者がのしかかってきた。

二歳と言ったら、泊まっている兄夫婦の子供だ。息苦しくなり、もうだめだと思った瞬間、声が聞こえてきた、子供の笑い声？それとも……何かを叫んでいる声。

その声が聞こえた瞬間、私は金縛りから解かれた。

そのうち、私も、だんだんと高校が苦痛になり始めた。勉強もレベルが高く、ついていけず、しかも、周りの目線が気になり、授業中でも恐怖心でいっぱいだった。

父親に相談し、悩んだ挙句、私も高校を辞める事になった。

それから、ずっと病院通いで、週に一回、人間とのコミュニケーションを図るための訓練をするためだ。今でも通っている。だが、

病状は、一向に良くなならない。気分は常に沈んだままで、好きな事、絵を書いたりパソコンをやったり、小説を書いたり、ゲームをやったり。でもそれが今は、あまり出来ていない。楽しいと感じなくなってしまうている。酷い時は、夜になると、幻聴が聞こえてきて、酷い恐怖に駆られる。

そうして、自分でも抑えられなくなると、ベッドの中で泣き叫ぶ事が多かった時期もあった。その度に、母親になだめられた。

もっとひどい時は金縛りにあう時だってあった。

常に体全体がだるく、何も手に付かない。中学の時のように、夜寝る前、死ぬのが怖くなったり、また明日学校だと思うと恐怖で泣いていたり、というのは無くなった。

だが、時々、泣き叫びたくなるような衝動に駆られる時がある。そう言うときの薬はもらってきているので、一応安心ができる。

病院でも、心を許しあえる友達が出来て、中学の時よりは、回復していると思う。

でも体のだるさが取れない。

両親からは「お前は結婚できない体だ」とまでも言われている。女として、結婚できないと言う事は致命傷でもあり、ショックが大きいものでもある。私は、悲しんだが、しょうがない事だと思いは諦めている。

前に男友達に、自分が弱いと思ひ込んでから駄目なんだ、強くなりなさい。それに、悩んでる暇が

あつたら、動け、と言われた時は、初めは頑張ろうと思った。でも日々過ごしているうちに、ダメなんだと

悟ってしまった。男だから、強くなれなんて言えるんだと。人はそうそう簡単に変わるものじゃない。

でも、私だって、ちよつとづつでも頑張って生きている。悩んでも暇があつたらって言うけど、悩みのない

人間なんていないんだ。皆何かしら悩みを抱えて生きている。悩んだっていいじゃないか。そう思った。

悩みごとがない人間がいたら、その人はどれだけ幸福な人生を歩んでいるんだと。

(後書き)

私は、今まで書いた事をすべて体験し、苦しんで、今に至る。これを読んで、嫌な気分になった人

がいたら謝ります。でも、事実なんです。私の感じたことすべてをここにつづりました。こんな体験をして

いる人間が、この世にいるんだという事を、理解してください。

長々と書きましたが、宜しければ感想をもらえたら嬉しいです。

2010年10月22日

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0343p/>

心の病

2010年11月21日06時03分発行